

平成27年度資源評価報告書(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成27年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

マチ類

アオダイ *Paracaesio caerulea*

ヒメダイ *Pristipomoides sieboldii*

オオヒメ *Pristipomoides filamentosus*

ハマダイ *Etelis coruscans*

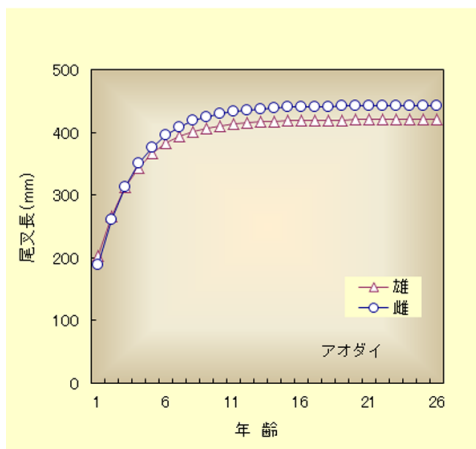
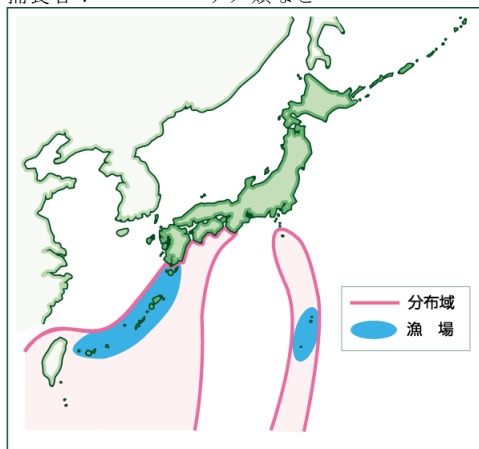
系群名(海域) (奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島)

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命： 不明
成熟開始年齢： アオダイは2歳(30%)、6歳(100%)、ヒメダイは0歳(40%)、4歳(100%)、オオヒメは2歳(40%)、5歳(100%)、ハマダイは9歳(69%)、19歳以上(100%)
産卵期・産卵場： アオダイは4～8月、ヒメダイとオオヒメは5～7月(盛期)、ハマダイは4～11月
索餌期・索餌場： 不明
食性： アオダイは大型動物プランクトン、ヒメダイとオオヒメは魚類、ヒカリボヤ類、浮遊性甲殻類、イカ類、ハマダイはイカ類、魚類
捕食者： サメ類など

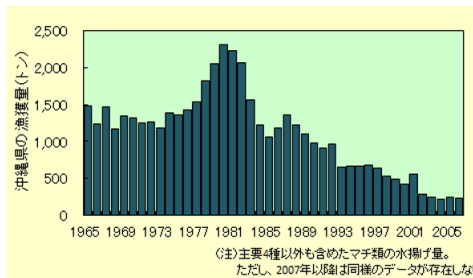
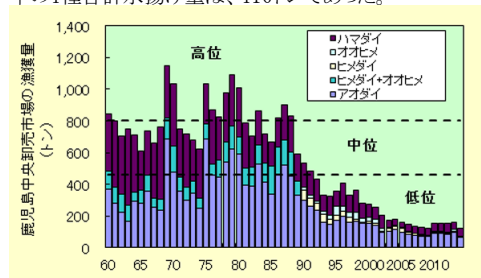


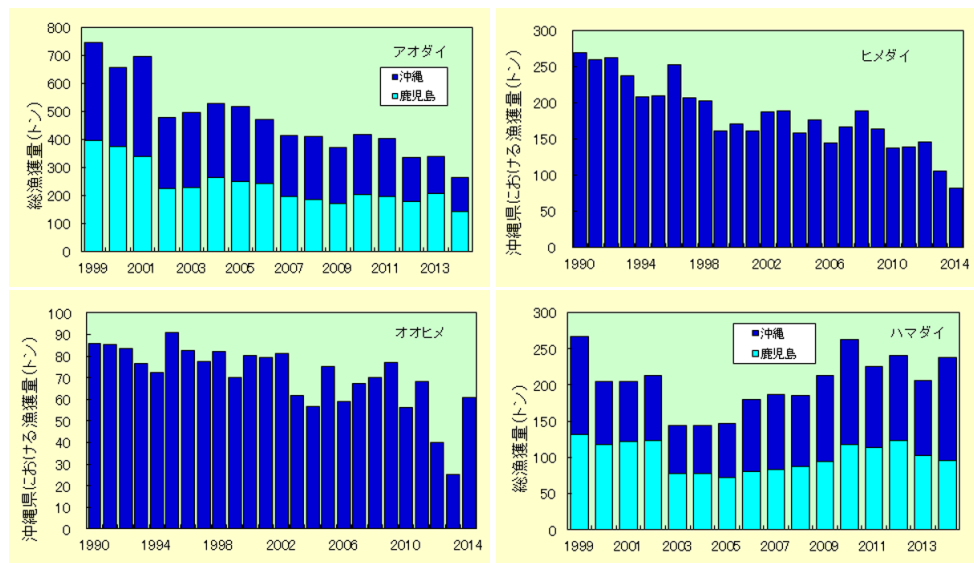
漁業の特徴

水深100m以深で操業する深海一本釣りや底建はえ縄により漁獲される。一本釣りでマチ類をねらい周年操業する専門業者が多いが、ソデイカ漁などと兼業する漁業者も存在する。1航海あたりの操業日数は5トン未満の小型船で日帰り～3日、5トン以上の船では1週間程度である。

漁獲の動向

鹿児島市中央卸売市場のマチ類4種の水揚げ量は、1988年まで800トン前後で推移したが、1989年以降減少し2014年には122トンとなった。沖縄農林水産統計年報によれば、マチ類水揚げ量は1980年の2,308トンを最大としてその後減少傾向に転じ、1985～1989年に1,065～1,564トン、2006年には238トンとなった。沖縄県集計による2014年の4種合計水揚げ量は、410トンであった。



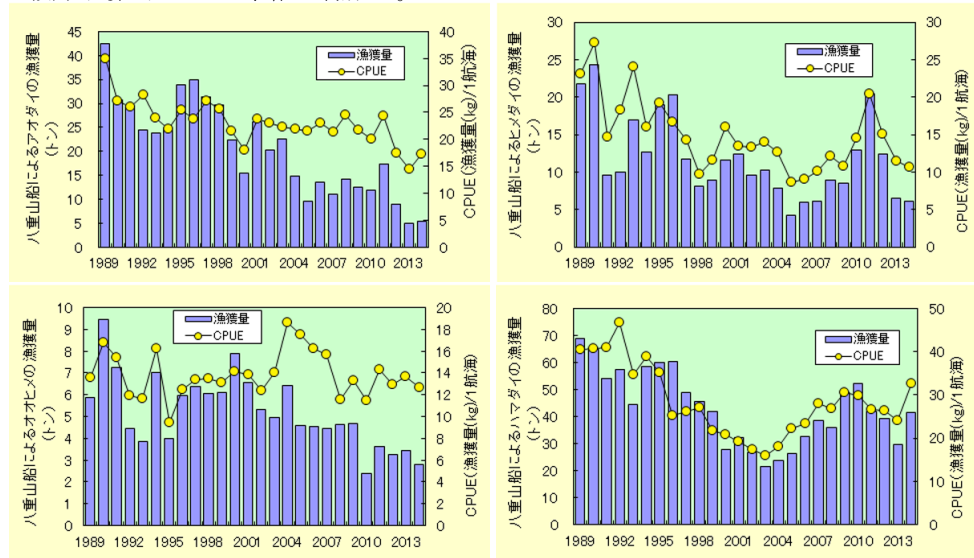


資源評価法

鹿児島県と沖縄県の主要港に水揚げされたマチ類の漁獲統計を用いて、魚種別漁獲量の経年変動傾向を検討した。沖縄県泊漁港に水揚げされる大型標本船および八重山漁協所属船の漁獲量と漁獲努力量の情報を収集し、過去26年間の漁獲状況を検討した。魚種別漁獲量と体長組成から年齢別漁獲尾数を推定し、それらを用いて大型船と八重山船のCPUE相乗平均でチューニングしたコホート解析を試行し、資源動向の参考とした。

資源状態

マチ類の資源水準は、鹿児島市中央卸売市場の1960年以降の水揚げ量をもとに、動向は魚種ごとに判断した。最高値と最低値の間を3等分して高位、中位、低位とした。2014年の水揚げ量は122トンで、水準は低位と判断した。アオダイ、ヒメダイ、オオヒメの資源動向は、近年5年の漁獲量とCPUEが一定レベルを維持していること、資源量が安定していることから横ばいと判断した。ハマダイの資源動向は、大型船の漁獲量、CPUEが増加傾向で、資源量も近年増加傾向と試算されたことから、増加と判断した。



アオダイ



ヒメダイ



オオヒメ



ハマダイ



管理方策

2005年に第1期資源回復計画が公表され、5年間の期限付きで18の保護区が設置された。2010年より第2期資源回復計画が開始され、2012年からは広域資源管理方針となって保護区の拡大(18から22区へ)、漁獲サイズ制限による小型魚保護も導入され、海域全体での漁獲努力の削減が実施されている。2014年4月には保護区を24に拡大する等、近年の取り組みは強化されており、地域によっては資源保護・回復の効果が認められたケースもあるが、海域全体での資源回復には至っていない。マチ類では漁獲による資源への影響が少なくないと見られるため、保護区の設置と共に、小型魚保護等による長期的な管理措置を実施する必要があると考えられる。

資源評価のまとめ

- 1960年以降の鹿児島市中央卸売市場のマチ類4種合計水揚げ量をもとに資源水準を判断
- 過去5年間の漁獲量、CPUEの推移に加え、チューニングVPAによる資源量試算値を参考として資源動向を判断
- 水準は低位、動向はアオダイ、ヒメダイ、オオヒメは横ばい、ハマダイは増加

管理方策のまとめ

- 海域全体での資源回復を図るためには、長期的な管理措置の実施が必要
- 2010年4月より魚種ごとに漁獲サイズ制限を設定し、保護区以外でも小型魚の保護を実施
- 保護区の拡大を実施(18→22→24)

資源評価は毎年更新されます。